

# 年中・年長児の運動能力の相違について

—一人っ子に着目して—

山岡 裕樹 (生涯スポーツ学科 地域スポーツコース)

指導教員 新宅 幸憲

キーワード：一人っ子，幼児，運動能力

## 1. 緒言

近年の子どもたちは、体力低下が問題視されており、子どもたちの多くが、屋外で遊ぶことよりも家の中で遊ぶようになってきている。外で遊ぶ習慣を植え付けることで、子どもたちの体力低下の問題も解消されていくであろう。

現代では、子どもの数が年々減少傾向にある。中でも、一人っ子の家庭が増えている。一人っ子の性格の特性は、非社会的、非協調的、利己的、落ち着きのなさなどが論文から挙げられている。文献の結果からも示されている通り、一人っ子はさまざまな分野において有意に劣る結果を示している。一人っ子が兄弟のいる子どもと比較して、優れている部分と劣っている部分を明らかにすることを目的とする。

## 2. 対象および方法

対象は、K 幼稚園年中・年長児計 157 名(男児 85 名，女児 72 名)で実施した。

方法は、25m走，軟式ボール投げ，片足連続跳び，立ち幅跳び，腕立て支持，反復横跳び，片足立ちの 7 種目を測定する。

## 3. 結果と考察

一人っ子は兄弟姉妹のいる子どもと比較して、運動能力が劣っているのは認められたが、有意な差は認められなかった。女兒の成績の方が、男児を大きく上回っており腕立て支持，片足立ちの 2 項目は男児を大きく上回る結果になった。年中・年長を比較してみると、年長児が年中児をすべての面で上回っており、学年があがるにつれ成績が良くなっていることが示唆される。

今回、年中児と年長児に焦点をあてて調査を行ったが、全体の結果として年中，年長両方とも女兒の方が男児よりも成績が大きく上回っていた。女兒のほうが男児よりも成績が良かったのは、女兒は男児よりも発育発達が早く、集中力が高いということが要因として推察される。

一人っ子が兄弟姉妹のいる子と比較して、運動能力が劣るといふ仮説が棄却された理由として、平均で見ると一人っ子が兄弟姉妹のいる子どもと差がなかったことが大きな要因だと

推察される。また、幼稚園で実施している体操教室やサッカー教室に通っている子どもも大勢おり、一人っ子の子どもも同じく通っているため、大きな差が出なかったと推察される。研究で明らかになったことは、3 人兄弟の二男である子どもの運動能力が高いということである。なぜなら二男の子どもは兄弟の間に挟まれていて、兄弟たちと一緒に遊ぶことで、高い運動能力を自然と身につけることができおり、今回のこの結果になったと考えられる。一人っ子の研究を調査した結果から、一人っ子も兄弟姉妹のいる子どもの家庭環境や自然環境などが変化することで、運動能力が上がると考察する。今回の 7 項目全て平均を上回っていた子どもの共通点は、身長，体重が平均値をわずかに上回ることである。

## 4. まとめ

本研究では、一人っ子が運動能力において劣る傾向を示した理由として、外遊びが少ないことや家庭環境，特に保護者が子どもと遊ぶ時間が少ないことが大きく関係していると示唆される。

## 参考文献

河端隆志，松村新也，宮側敏明，新宅幸憲，鈴木崇志(2004) 児童の身体平衡バランス能と運動能および身体特徴との関係(加齢，性差) 第 59 回日本体力医学学会，体力科学. 53(6) : 768.  
新宅幸憲(2008) 幼児の立位姿勢における静的平衡性の研究(平成 19 年度大学院スポーツ科学研究科博士論文要旨) 大阪体育大学紀要. 39 : 290-291.